☆被災地の歴史資料・文化財の保全、震災の経験の記録化と保存!!
★幅広いネットワークづくりを通じて、歴史・文化を復興に活かす!!
☆被災地から全国へ、歴史学と社会をめぐる普遍的な課題へ!!

史料ネット NEWS LETTER

第８号　1997年３月19日（水）

発行 歴史資料ネットワーク（神大文学部内）
TEL078-881-1212（内線呼出），FAX803-0486

目　次

「震災と歴史学パート２」速報ほか…… 1　震災資料・記録編さんをめぐる動き…… 3
埋蔵文化財問題の現状ほか…… 2　震災後の古書市場の動向…… 3

特集　史料ネットに寄せられた声から

河島 真氏… 4　保立道久氏… 5　塚田 孝氏… 6　山本幸俊氏… 7　田中淳一郎氏… 9
細井 守氏…10　佐賀 朝氏…10　日本史研究会大会特設部会参加者の感想文から……12
文書等所蔵施設の被害調査まとまる……18　文献情報……18

「阪神・淡路大震災と歴史学 パート２」開催！！

前号で予告した研究会「阪神・淡路大震災と歴史学 パート２」が、２月16日（日）午後１時30分～５時、参加者38名によりエルおおさかにて開催されました。辻川敦氏による、日本史研究会大会特設部会での議論を受けてのコメントののち、市民と研究者のずれをどう埋めていくのか、ボランティアと行政の関わり方はどうあるべきなのか、今回の活動を戦後歴史学や史料保存事業の流れのなかでどう評価するのか、といった点について活発に意見がかわされました。

史料ネットでは、今後もこういった議論を積み重ねていきたいと考えています。なお、この研究会での議論の内容については、いくつかの学会誌に参加者の報告が掲載される予定です。

被災地の現状－神戸市東灘区魚崎地区から－

☆被災地の復興は着々と進んでいるかのように言われています。その一方でﾏｽｺﾐ報道からも、復興のあり方をめぐって様々な問題点が噴出していることがうかがわれます。
★被災地の実態はどうなっているのか、激甚地のひとつである神戸市東灘区魚崎地区に住まれ、ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱとして被災史料・文化財問題にかかわるかたわら住民としてまちづくりに取り組まれる内田俊秀氏（京都造形芸術大学助教授）に話をうかがいました。

今、被災地の更地にはどんどんと高層住宅が建ちつつあります。従来からの街のたたずまいなどといったことは、一切おかまいなしです。とにかく建てればよい、住宅を開発して売って、そこに人が住めばよいという発想です。開発主体の企業は、行政が認可しているのだからそれで良いという態度で、歴史的にはぐくまれてきた景観を尊重しようというような発想はまったく感じられません。行政側も、それをなんとかしようという気もないようです。

建てられる住宅のほとんどは、20代前後の若い世代にねらいを絞ったマンションです。高価だと売れないので、おのずと一戸あたりの面積と価格が決まってくるのです。永住を前提としない、子供ができると手狭になり転出していくようなマンションばかり目につきます。

こういった住宅に住む人々は、ずっと住み続ける気があまりないので、地域の住環境をどうしようといった関心もあまりない。そして、こういった住宅が増えれば増えるほど、住民がどんどん入れ替わっていくことになります。自治会などを中心に、皆でまちづくりを考えていかなければならないのに、これでは地域のコミュニティは希薄化するばかりです。

こうして、高層マンションと、地域に関心のない住民ばかりが増えていく、これが被災地の実情です。こうしたなかで、なんとか地域のコミュニティを建て直し、少しでも住民本位のまちづくりの方向へと頑張っているところですが、とにかくしんどい。歴史や文化がどうのこうのというよりも、まず住環境の問題について周囲に問いかけているところです。こういう足もとを見つめ直す視点から、住民が神戸や阪神地域の近代の歴史を考え直していく、それにこたえるような学際的な研究を望んでいます。この地域には外国人も多い。地域を考えるうえでは国際的な視点も必要になってくるでしょう。　（内田氏談、文責編集部）

史料ネット活動支援募金　（郵便振替）
名義　阪神大震災対策歴史学会連絡会　　口座番号　０１０９０－７－２３００９